

# 学童運営を考える

## 震災後初 大船渡市で

### 合宿研修会・指導員学校

岩手県学童保育連絡協議会は8月26、27の両日、大船渡市で第45回指導員学校、第30回合宿研修会を開催しました。気仙地区での開催は震災後初めて。県内の学童の父母、指導員ら292人が参加しました。

初日は三陸公民館で開会行事と分科会を行った後、大船渡プラザホ



来賓の戸田公明大船渡市長

テルに移動して夕食交流会を行い、2日目は同ホテルで全体会を行いました。

開会行事で県連協の千田広幸会長は「震災後の4月、さくらりっくクラブに行った。入口に気仙連協の連絡網が貼ってあり、それを見て高田のやどかりクラブにたどりつくことができた。そこから県連協の支援活動が始まった。当時のこと思うと、ここで合宿研ができることは感慨深い。気仙連協のご厚意に感謝する」とあいさつ。

続いて気仙連協の井上永治会長が「震災を経験し学童は子どもたちの安心、安全な居場所だということを感じた。この居場所を大切にしていこう」と述べました。



岩手県学童保育連絡協議会  
〒020-0122  
盛岡市みたけ3-38-20  
岩手県青少年会館内  
Tel・Fax 019-681-0651

### 合宿研指導員 学校特集号

来賓の戸田公明大船渡市長は「子どもは未来の宝、市を挙げて子育て施策に取り組んでいく」とあいさつしました。

開会行事の後は7会場

### 全体会 講演①

### 働きながらの子育てと家族・家庭

NPO福祉広場理事長 池添 素 さん

働くことと子育ては両立できない。両方をきちんと分けることが大事。働いている時にあれこれ考えない。子どもの顔が見えるところでは子どものことを一番に考える。「子どもファースト」でいい。

子どもは朝学校に行く時は100%充電されている状態。学童や家に帰ってくる時はバッテリーが減っている。0%で家に帰ってくる子もいる。家でしっかり充電できる学校でもがんばれるようになる。

よくある子育ての勘違いに「甘える」と「甘やかす」がある。「甘える」とは子どもの気持ちを受



け止めること。「甘やかす」は大人の都合や大人の気持ちで子どもを受け止めること。子ども「に」話を聞くのではなく、子ども「の」話を聞く。子どもが宿題をしないでゲームばかりしていると、話を聞くが、宿題は家庭に主導権がある。自分

に分かれて分科会を行い講義や交流で、それぞれ関心のあるテーマを掘り下げました。

今回の研修会では県内でも学童クラブの法人

化について関心が高まっていることから「学童の運営にかかわって」の分科会をもうけ、NPO法人化についての事例を学びました。

できない時は答えを教えて気付けさせる。気付きは学びになる。ゲームは親が時間を決めるのではなく、子どもに時間を決めてもらい約束する。「約束を守る」ということをゲームを通して教えていく。

子育ては同時に自分育てでもある。時には出会いたくなかった自分や他人を発見することもある。そんな時は一人で悩まず誰かに話そう。大人同士がうまくいかないときは話し合わず考える。

子育てとは子どもの夢をかなえる仕事。いつからでもやり直しができる。たし算(自信)、ひき算(相手からの「聞いて」にこたえる)、かけ算(学童など集団の力)わり算(たくさんの人との分かち合いの中)で育てていく。バッテリーが充電できる、家庭を目指していく。

全体会 講演②

# 学童保育の運営にかかわって

さいたま市連協事務局次長 加藤哲夫 さん

さいたま市連協では「学童保育のいい所を語ろう」キャンペーンをやった。各学童の保護者が学童のよい所を書き、掲示するというもの。そういう実感の中からしか学童をよくするエネルギーは湧いてこない。

法人化の前提として保護者と指導員がしっかりと関係をつくり、どんな



指したが合意できず頓挫。合意できた学童同士で法人化し、合同運営する形になっていった。学童は誰もやる人がいなかった時代から、今は企業が参入する時代になった。市全体として学童をどうしていくのか、考える時期にきている。市連協で培ってきたものを生かし、困難を全体で支えあう。お互いに助け合う関係、団結に法人化がいてくるのではないか。

学童保育を目指していくのかしつかり話し合う。最終的に「学童に預けてよかった」と思ってもらおう。それが運営ではないか。法人化で保護者会運営の悩みが解消される訳ではない。何かが劇的に変わることはない。

さいたま市では2006年から市が建設した施設を無償貸与し、運営

は保護者会に任せるといいう転換をした。市が施設を貸与するにあたり、法人格があるほうがやりやすいとなった。公金を投入するのに任意団体でよいのかという議論が議会側からもあった。市連協は当初、合同運営でのNPO法人化を目

埼玉県から参加した真田祐さん(前全国連協事務局次長)に聞きました。

「震災から6年が経ち現地の皆さんの気持ちにいい意味で変化があったのかなと思う。また、全国の皆さんからの支援が原動力になっていないのではないかと感じた。合宿研はみんなで大変さを共有し、元気をもら

## 真田 祐さん(前全国連協事務局次長)に聞く



### 運営指針の定着が課題

える場所。気仙連協の力になっていくと思う」  
「新制度がはじまって2年が経過したが現状は「国の制度は変わっても市町村が変わって

ない。行政が運営指針を理解できていないため具体的な動きになっていない。学童側も連協に加盟しているところでは理解が広まりつつある

が、連協に加盟していないところは今まで通りでよいと行政に言われてしまい、温度差が生じてしまっている」  
「運営指針が広まるには

「運営指針はただ読むだけでは分かりにくい。できるだけ早く定着させるには、このような研修会がよい機会だ。国が求める学童の姿を深め、学び合う。そしてそれが運営指針とどうつながっているのかを知ることができる。また、それを指導員だけでなく保護者も分かってくることが大切。岩手の合宿研は保護者の参加も多い。そういう意味でも、この合宿研はとも意義ある場だと思っている」

## 分科会

### 参加者ひとりごと

大船渡市末崎学童保育希望の丘

指導員 鈴木 優里 さん

講師の先生の資料がとても参考になった。集団の中の1人に対応していく難しさはあるが、何か問題が起こったとき、くり返し原因を確認することが必要だと分かった。

(第6分科会 支援を必要とする児童への理解)

### くり返し原因探る

北上市笠松学童保育所

指導員 高橋 優子 さん

真田祐先生の「ほいく誌のよいところではなく、違和感を覚えた部分を洗い出し、自分の保育との違いを明確にしていくことが大切」というお話に気づきがあった。他の学童の実践も聞き、勉強になった。

(第7分科会 ほいく誌をつかって)

### ほいく誌に新たな気づき

盛岡市緑が丘学童保育クラブ

保護者 小嶋 美沙子 さん

分科会の交流で保護者を気持ちよく巻き込んでいく工夫を知ることができた。連協の活動について、学童同士が情報交換し、横のつながりを持ちながら制度を変えていく必要性を感じた。

(第8分科会 父母会・保護者会の役割と活動)

### 横のつながり生かして